



日刊動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)
(鉄電) 千葉 2935・2939 番
電話 (公) 043 (22) 4772
97.3.31 No. 4772

「雇用を守る」は身を守るだけ ファシスト労組・JR総連の正体

守ったのは革マルの雇用だけ

JR総連・革マルがつねづね口に、「組合員の雇用を守る」、「組合員の利益を守る」という言葉の真意はなにか。それは、己れの悪業を正当化するための卑劣なウソである。実際にやってきたことは、革マルという党派、党員の「雇用を守る」、「利益を守る」ことだけである。

八五年の六月に動労本部の委員長となった、現JR総連会長の革マル松崎は、「おれは動労の委員長なんだから、動労の組合員の雇用を守らばいいんだ」と別に、国労の組合員の雇用なんか守る必要はさらさらないんだ」と豪語した。

し、うまくいくのも一時だけだ(今のJR総連の組織崩壊的危機を見よ!)。そして、動労の組合員の雇用を守ったかという点、まったくそうではない。「首切り三本柱(若年退職、出向、一時帰休)への動労の率先協力の中で、多くの動労組合員が泣く泣く職場を去っていった。

八五年の六月に動労本部の委員長となった、現JR総連会長の革マル松崎は、「おれは動労の委員長なんだから、動労の組合員の雇用を守らばいいんだ」と別に、国労の組合員の雇用なんか守る必要はさらさらないんだ」と豪語した。しかし、これ自体、大きな誤ちがいた。国鉄労働者全体の利害を守る立場に立たないかぎり、個別の動労や国労の労働者の利害も守れない。これは労働運動にとって本質的なことだ。自分が生きるために、他を踏みつけて、犠牲にする—こうした考えは、ものすごい腐敗をもたらす

現させた。一方、「国鉄改革に仇なす」国労に対しては、当局と一体となって切崩し、分裂工作を行なった。その一つが、いわゆる「血の入れ替え」だ。分割・民営化に向う毎年何万人という合理化の中で、特に、ローカル線の切り捨てで、多くの「余剰人員」が生み出された。北海道や東北、九州、そして、東日本は東京へ、九州は大阪へといった「広域配転」を革マルが率先して担った。

この論理を自らの組合員に適用したわけだ。しかし、革マルに対しては、「適用外」である。国鉄分割・民営化の「論功行賞」として、JR移行後、革マルが鉄道労働者の重要ポストについた。また、松崎は、国鉄時代に解雇されていた革マルII動労役員を、JR関連会社役員に就職させることを、自民党や運輸省、JR各社に要求し、実

以上、ほんの一例だが、革マルの「言っていること」と「やっていること」は、こんなにも違うのだ。まさに、「ファシストの二枚舌」とは、このことだ!

今、このことが象徴的に現れているのが、貨物をめぐる事だ。日貨労委員長の革マル・城石は、「貨物会社経営安定のために、職場で苦闘している組合員に少しでも報ゆるために、満身の力で頑張っていきたい」といって、「新フレイト二一」、「貨物ベア〇・三二%」に率先協力だ。そもそも革マルの頭のなかにあるのは、「JR東日本の革マル結託体制をどう維持するのか」ということだけだ。城石は、どんな大合理化も、度重なる賃金の格差も、このために、そっくり全てを認めて貨物の労働者を当局にさしだしているのだ。これが、ファシスト労組「JR総連の正体だ!こんな輩に、「労働運動」だ、「雇用を守る」だ、はては、「戦争に反対し平和と憲法を守る」などと言わせておいてよいものか!革マルがやろうとしていることは、この正反対のことだ。今や、全国、全職場で、革マルに対する怒りは満ち溢れている。この怒りに火をつけ、JR総連・革マル打倒の先陣をきるのにはわれわれ動労千葉だ。いせ、JR総連解体・組織拡大に総決起しよう!

怒りをもって、JR総連解体へ